

# 週刊現代2015年12月12日号

## 人として信頼できるがんの名医④

がんの種類	医師名	病院 所属	専門と人柄
乳がん	片岡明美	がん研有明病院/ 乳腺センター外科副院長	妊娠出産後、外科医に復帰。自身の母親も乳がんになっているので、家族の苦悩や悲しみをよく理解している。
	武井寛幸	日本医科大学付属病院/ 乳腺科教授	年間400症例を超える乳がん手術をするチームを率いる。患者に合わせた「テーラーメイド」医療を目指している。
	戸崎光宏	さがらプレストピアヘルスケア グループ乳腺科部長/相模病院 附属プレストセンター放射線科部長	放射線科の画像診断医。乳腺の画像診断では日本一。常に乳がん患者やそうなる可能性のある人の立場に立つ。
	中村清吾	昭和大学病院/ プレストセンター長	乳腺外科の第一人者。スケジュールさえ合えば、どんな患者会からのオファーでも講演にかけつけてくれる。
	難波清	北斗病院(帯広)/ 乳腺・乳がんセンター長	患者に対する態度は丁寧で、画像診断や針生検の腕はびかいち。治療のために遠方から訪れる患者も多い。
	林直輝	聖路加国際病院/ 乳腺外科副院長	名門の誉れ高い聖路加の乳腺外科のホープ。患者の「病と戦う気持ち」をサポートすることに尽力している。
	堀本義哉	順天堂大学医学部附属 順天堂医院/乳腺科准教授	不安を煽るような説明をする医師も多いなか、淡々と理性的に治療法を説明するので患者も冷静でいられる。
子宮頸がん・ 卵巣がん	岡本愛光	東京慈恵会医科大学 附属病院/婦人科教授	男性医師でありながら「婦人科系がんの患者の気持ちをよく理解してくれて、気配りが細やか」だと評判。
	尾松公平	がん研有明病院/ 婦人科医長	婦人がんというセンシティブな病を患った患者の話をじっくり聞き、納得するまで丁寧な説明をしてくれる。
脳腫瘍	篠浦伸禎	がん・感染症センター都立 駒込病院/脳神経外科部長	局所麻酔で手術の途中で患者を自覚めさせる「覚醒下手術」を得意とする。放射線科や麻酔科との連携も密。
(喉頭がん・咽頭がん)	浅井昌大	鎌ヶ谷総合病院/頭頸部 外科・耳鼻咽喉科部長	病状の説明が懇切丁寧でわかりやすいと評判。「不安を抱える患者の立場に常に配慮している」という声も。
	朝隆孝宏	東京医科歯科大学医学部 附属病院/頭頸部外科教授	患者の容姿や声などの機能を損なわないよう、耳鼻咽喉科、形成外科などの他科と連携しながら手術法を開発。
	海老原敏	練馬光が丘病院/ 常勤顧問	長年がん治療の最前線に立ってきた。三笠宮寛仁親王の執刀医。引退後はがん相談所を開設し、啓もうに努める。
	血井靖長	血井医院/ 院長	話を聞くばかりで診察が行き届かない医者も多いなか、細かく患者を診て、小さながんも見逃さない真摯さがある。
	松本文彦	国立がん研究センター 中央病院/頭頸部腫瘍科	患者の不安を和らげようと、明るい笑顔で冗談交じりに診察するが、身体の異常な箇所を的確に発見する名医。
血液腫瘍	相羽恵介	東京慈恵会医科大学附属病院/ 腫瘍・血液内科教授	化学療法の大敵。患者にがん手帳をつけてもらい、それを読み込むことで病状をきめ細かに把握する気配りの人。
	押味和夫	釧路ろうさい病院/ 血液内科	名門・順天堂大学血液内科の元教授だが、あえて北海道に移住し、地域医療に向き合う珍しいタイプの医師。
がん皮膚	山崎直也	国立がん研究センター 中央病院/皮膚腫瘍科科長	悪性黒色腫(メラノーマ)を国内で最も多く治療している。チームワークを重んじ、若手の育成にも尽力する。
がん希少	川井章	国立がん研究センター中央 病院/希少がんセンター長	骨や軟部組織から生じる肉腫(サルコーマ)のスペシャリスト。専任の看護師によるホットラインも開設した。

者さんの心に届き、悩みを軽減できる(樋野氏)治療がもはや難しいと  
 なったとき、それでも戦おうとする医師もいる。茨城県立中央病院で消化器全般を担当する外科医、吉見富洋氏だ。吉見氏はがんセンターや大病院で「手術不可能」と言われた患者を積極的に引き受けることで有名だ。「人柄としては、陽気でもとても快活、まっすぐな方です。他の病院で手術を断られた患者に対して、ぎりぎりの可能性を探っている(国立大学のがん専門医)

ただ、あまりに率直で菌に衣着せぬものの言い方のせいで、上司と衝突したこともあった。そのせいで、一時期、病院内で干され、診療に関われない部署に飛ばされたこともあったという。「ところが、かつて吉見先生に手術をしてもらって完治した患者さんたちが、地方新聞に意見広告